

床下

3年

晩秋の風に吹かれ、つられるように空を見上げれば、空は茜色にのまれてゆくところだった。空色と茜色の見事なコントラストに、思わず息をするのも忘れて魅入ってしまった。が、田んぼの向こうの森の闇が広がる前に、家に帰らなければならない。しぶしぶ視線を空からおろし、限り無く続いていきそうな田んぼの畔道を、一人のそのそ歩く。ここら一带は街灯一つないので、暗くなつてしまえば月の光を頼るほかない。遠くの方にほんやりと、私の実家らしきものが見え、小走り気味に家路を急いだ。普段の私らしくもなく、少し心が高揚しているようだった。そのせいか、昔よりも少し家が遠かったように思えた。やっと家の前につき、はやる気持ちを抑えて戸を叩いた。そろそろインターホンでもつけてほしいものだ。しばらくして、ガラリと木戸が開き、暗がりからヌツと白い顔がのぞいた。母である。

「おかえりなさい。」

少し安堵したように顔をゆるませて、母はそう言った。久し振りに見る母の顔に、少し心がほぐれた気がした。玄関に一步足を踏み入れると白檀の香りがした。たぶん亡くなった祖母のお参りをしていたのだろう。

「お母さん、アレはちゃんと床下にあるっ？」

はき物をぬぎつつ、母にそう問いかけた。すると母は少し口角を上げた。但し片方のみ。

「ええ、もちろんよ。一ヶ月前からずっと床下に閉じこめてあるわ。」

母の言葉につられるように、私もニヤリと口角を歪めた。そして更に質問を続ける。

「それは良かった。じゃあ新しいのはどう処理したの？」

当たり前のように仏壇に歩を進める母の背中が、先程よりも少しのびた気がした。

「ああ、ソレには切り口から塩水をしみこませてやってあるよ。ただね、切る時にすぐく耳がわりだったわ。」

アツハツハハと豪快に笑う母の様子を、私は満面の笑みで眺めていた。

「ああ…でも、絶対バレないようにね。バレると厄介だから。」

母は急に冷静になって、静かに私にそうつけてきた。私はその言葉に、ゾクリとした背徳感を得た。ダメだ…完全にクセになっている。

仏壇に手を合わせている時も、足が今にも動きそうなほどだった。早く見たい。早く見たい。

お参りを素早く終わらせ、台所へ走る。たてつけの悪い扉に少しイライラしながらも、台所の中に滑りこむように入った。この狭い空間の中に、アレの臭いが充満していた。そとと床下収納に近寄り、木をペラリとめくると、更に臭いが濃くなり、大きな壺がうつも見えた。私は蓋をとろうとそれに手をのばした。

——ザクツザクツ

その時だった、外から玉砂利を踏む音が聞こえたのは。私の頬を冷やりとしたものが伝い、口は乾き、胃がキリリと痛んだ。その足音は、だんだんとこちらに近づいてきた。私は恐怖から、銅像のように固まった。やがて足音がやみ、勝手口のすりガラスから、はつきりと人かげが見えた。ドアノブがガチャリと動き、ドアのキイという悲痛な叫びが私の恐怖を増幅させた。

「ただいま」

自分の想像と全く同じ人物が、ドアの前に立っていた。私の…父だ。

「あつ…また僕との約束を破ったんだね。」

父は息そうに首を横に振った。そしてそのままこちらに歩を進めてきた。

「ああ…こんなにくさん作ったのか。2人とも高血圧なんだからだめだと言っただろ。」

父は容赦なく壺の蓋をはぎ取った。

中から姿を現したのは、青白く長いモノだった。窮屈そうにギューギューにつめられ、てらてらと鈍く光っていた。父はいつもにも増して大きなため息をつく。壺をひっぱり出し、どこかへ運んでいってしまった。

それからしばらくして、父が玄関から帰宅した。近所にアレをわけてしまったのか、漬物はもう残っていないかった。空になった壺だけが、あめ色にひっそりと光っていた。

おわり